

私は一冊の本を手を取った。表紙には「平和のバトン」と書かれている。

この本には、広島で起きた8月6日の悲劇が綴られている。私はこの重苦しいような本に興味を持った。このような本を手を取ったことには理由があった。

「今の時代に核兵器が使われることなんて有り得ない。」私がそう友人に言うと、「平和慣れしすぎだよ。」と友人が言った。たしかに私は核を自分には遠い存在だと思っていた。友人の言葉を聞いて、私は核兵器について考えさせられることになった。最初に頭に浮かんだ事は、北朝鮮から度々発射される弾道ミサイルだ。ミサイルが日本に影響を及ぼす可能性がある、全国瞬時警報システム、「Jアラート」が鳴る。Jアラートが出た時、私はもしかしたら日本に弾道ミサイルが落下して、戦争に巻き込まれるかもしれない、自分は死んでしまうかもしれないと強い恐怖心を覚えた。人生で初めてミサイル核への強い恐怖心が現れ、核兵器についてさらに知りたいと思うようになった。核について関心を持った出来事はもう1つある。それは、ロシアによるウクライナ侵攻が始まったことだ。当初ニュースで見た時は、それほど大きな事態にはならないだろう。2ヶ月ほどで終わるだろう、戦争がどれだけ大きくなろうとも流石に国民には手を出さないだろう、と勝手に思い込み、他人事のように思っていた。

しかし、私の勝手な予想は大きく外れた。ウクライナ侵攻は一年近く続き、ウクライナの学校や病院には爆弾が投げ込まれ、建物、町は崩壊。国民は捕らえられ、拷問され、逃げ回っている。私の有り得ないと思っていたことが現実になっていた。衝撃的だった。このままでは、いつ核兵器が使われてもおかしくないと思った。

ウクライナの現状から、核を身近に感じる事ができ、広島・長崎に核兵器が落とされた事について、さらに関心を持った。このような体験から、「平和のバトン」という本を選んだ。

この本にはとても残酷で悲惨な出来事がたくさん綴られていた。「広島の上空に突如姿をあらわしたB-29は鳥のフンのように核を落とした。一瞬にして広島から色がなくなったようだ。」「吹き飛ばされ体がバラバラになる人、火傷によって皮膚が垂れ下がった人、人間なのか分からないような状態でお母さん痛いよと泣き叫ぶ子供。」私は今までにないような恐怖を感じ、読み進めていく事が怖くなった。さらに私に衝撃を与えたのは、核兵器が落ちた後の原爆症というものだ。

原爆から逃れられたとしても、全身的な機能低下、造血器障害、悪性腫瘍などが現れ、原爆症を患った人ほとんどが数日内に亡くなってしまったという。このことを知り、「今この時、自分の元へ核兵器が落とされてしまったら壊滅的だ。」と核兵器の怖さを改めて実感した。本を読んだ事によって、戦争、核兵器について知りたいという気持ちが高まり戦争を経験した私の祖母に、本を読んだこと、そして戦争について教えてほしいと話してみた。すると祖母は「なんでそんな気分が悪くなるような本を読んでいるの。あまりその話はしたくないし、思い出したくもない。」と顔をしかめながら言った。私は驚きと悲しさが同時に押し寄せた。私の祖母はいつも私の質問には笑顔で答えてくれる。そんな祖母が顔をしかめて

初めて質問を断った。そんな悲しい辛いような祖母の顔も初めて見た。祖母は実の父を戦争によって亡くしており、祖母も実際に戦争を経験していて、防空壕にも入ったことがあるようだ。祖母の経験は今でも顔をしかめるほどの辛い経験だったのだろうと私も顔をしかめた。私は祖母に戦争の事を聞くべきではなかったと後悔した程だった。戦争を経験した人は何十年経っても戦争の悲劇を忘れない。私は、戦争を全く知らない平和ボケした世界を作っ  
てはいけないと思った。このような体験から核兵器は世界を一瞬にして誰も望まない悲惨なものにしてしまうということを実感した。もし今の時代に、自分の身に核兵器が落ちると  
いう悲劇が起きてしまったら、と、とても恐怖を感じた。核兵器を身近に感じた。これからの世界で広島  
の原爆のように多くの人が悲しむような事は絶対に起きてはいけない。これから自分が生きている間の世界自分が居なくなった後の世界にも核兵器は必要ない。